クラムボンの多い料理店　【オムニバス企画】

V.A.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クラムボンの多い料理店　【オムニバス企画】

【Ｎコード】
Ｎ１８０９Ｖ

【作者名】
Ｖ．Ａ．

【あらすじ】
作者：Ｖ．Ａ．
創作小説経験者から未経験者まで、複数の作者によるオムニバス形式の短編集。
唯一決められたルールは「クラムボン」を扱うこと。
宮沢賢治の短編童話『やまなし』に登場する謎の言葉「クラムボン」が主題の自由な創作。
果たして、クラムボンの正体は解き明かされるのか？

＊掲載される作品は他サイト、ブログなどでも公開される場合があります。

クラムボンの多い料理店

この短編集は宮沢賢治の書いた短編童話『やまなし』に登場する謎の言葉「クラムボン」を扱った作品を集めたものです。

「クラムボン」について作者たち各々が、独自の解釈をし、創作された短編小説たちを掲載しております。

「注文の多い料理店」に迷い込んだ青年たちが注意書きを自分の都合のいいように解釈したように、我々作者は、自由にクラムボンを解釈しました。

作者はその創作において完成度を一切考えておりません。創作小説未経験者も作者に含まれております。あくまでも「クラムボンの解釈」が主なテーマです。

よって質問は受け付けますが、辛口のコメントや批判などはご遠慮下さい。

また、この短編集を読まれる方々は『やまなし』を読んでいるという前提で我々は創作いたしました。

極短い作品ですので、ネットでの検索の上、先に『やまなし』を読んでおくことを推奨いたします。

そしてこの企画は今も尚進行中です。

参加を希望される際は私、ｒａｋｉまで連絡を。

最後に一言。

「当軒はクラムボンの多い料理店ですからどうかそこはごしょうちください。」

鍋　【作：ＭｅｅＡ】

「気を使わないでいいのよ、和哉さん。ただ夕食食べにいくだけなんだから。」
そうは言われてもさすがに彼女の両親に会うのに緊張しない男はいないだろう。
結婚を前提におつきあいさせていただいております、とでも言えばいいのか、それともまだ早いのか。
服は何を着ていけばいいのか。スーツだと固すぎるのか。しかしあまりラフな格好だと・・・。
・・・正直面倒だ。

まあ、そんなこんな考えながら結局約束の日になってしまった。
仕事帰りの彼女を迎えに行き、彼女の実家へ向かう。
ひさびさの実家ということもあってか、彼女は楽しそうだが僕は内心ドキドキである。
彼女の両親に気に入ってもらえなかったら・・・。
ネガティブな思考に走ろうとする自分を食い止めつつ自問自答していたところ、
「ここよ。」
という彼女の声で現実に引き戻された。

・・・帰りたい。

いや、ありえないだろ。
なんなんだ、このデカい門扉。
てかなんか門番さんみたいな人いるけど。

どうみてもどっかの大富豪か大財閥かなんかのお宅ですけど。
彼女がここの一人娘・・・？
いやいやいやいや。
丁重にお断りして今すぐまわれ右、をして帰りたい気分だが。

「何してるの？早く入りましょう。」

ですよね・・・。
俺は腹を括って、門番さんに挨拶をし、平然とした顔・・・ができていたらいいなと思いながら分厚い門扉を抜けた。

・・・広い。

まあ予想はしていたが広い庭だ。
ガーデニングがご趣味だという彼女のお母様のご意向か、庭のあちらこちらに色とりどりの花々が綺麗に咲き誇っている。
悠然と俺の横を通り過ぎる飼い犬であろうドーベルマンにビビりながら家の玄関にたどりつく。

「ただいまー。」
「お邪魔しまーす。」
恐る恐る玄関に足を踏み入れる。大理石か何かでできているのか黒光りする床。そして一見して高いであろうと想像できる置物の数々。
そしてこちらを見つめる熊のはく製の虚ろな目。
庶民の俺には少々刺激の強すぎる玄関である。

「美香さんお帰りなさい。そちら、和哉さん？初めまして。こんなところですけどよかったらゆっくりしていってくださいな。」
和服姿の妙齢の美女が出てきた。この人がお義母さんなのだろうか。
こんなところですけどとは・・・庶民の俺には過ごしづらいお金持

ち空間ですけど、ということなのだろうかと考えたくなるくらいすごいところなのだが。
「桐原和也です。いつも娘さんにお世話になってます。」
「君が和哉君かね。いやあ、立派な若者だ。今夜はゆっくりしていってくれたまえ。」
恰幅のよい気さくそうな紳士だった。いや、正直極道のドンのような人を想像していた俺は安心した。
「これ、つまらないものですが。自分の実家の方では有名なお酒です。」
実家に彼女のお宅へお邪魔するという話ふともらしたところ、失礼があってはいけないからと両親が送ってくれたものだった。そのときはそんな大げさな、と思ったが今になってみると非常にありがたい。
「お、これはあの有名な！ありがたいね、今夜は一杯といわず飲み明かそうじゃないか、和哉君。」
どうやらお義父さんもご存じであったらしい。本当によかった。こんなに実家の父と母に感謝したのは初めてかもしれない。今度何かこちらの名物でも送っておこう。
「今夜は寒いですからね、お鍋にしようと思いまして。」
とお義母さんに案内された場所は、床の間に達筆すぎて何が書いてあるのかわからない掛け軸が飾られた落ち着いた雰囲気の和室であった。玄関の様子から想像するに、家の中すべてが高そうなもので埋め尽くされているのかと思ったので意外だった。
しかし、鍋を運んできたお義母さんの姿を見て前言撤回せざるをえなかった。鍋が輝いていたのである、金色に。
「このお鍋はまさか？」
当然のようにしている彼女の前で恐る恐る聞いてみる。
「純金です。お鍋のときに雑味が入らなくておいしいですよ。」

笑顔で答えてくれるお義母さんが恐ろしい。純金の鍋って・・・いくらするんだよ、おい。
そして鍋のふたを開けてまたびっくり。
中は・・・空だった。
湧き立たせた湯の中に何かを入れて卓上で調理して食べるものらしい。
しゃぶしゃぶでもやるのだろうか。

「はやく食べたいなー。」
彼女が無邪気に言っている。慣れた光景らしい。
本当にこの子、俺なんかと付き合っていい人種なんだろうか。
鍋で、家で、いやはやくも門扉で格差を感じていた俺は内心つぶやいた。
「鮮度がいいのを買っておきましたからね。せっかく和哉さんにお越しいただくんだから美味しいのを食べていただきたくて。かぷかぷ元気に啼いてますよ。」
・・・かぷかぷ？今お義母さん鮮度がいいのって言ったか？ということはしゃぶしゃぶじゃないのか。何なんだ、いったい。鍋料理で食べるかぷかぷ啼く食材？

「いや、アレは本当にお酒にあうよなあ、和哉君。」
だからアレっていったい何なんだ！！
「もしかして和哉さん、アレ食べたことないの？」
彼女が不思議そうな顔をしてこっちを向く。いや、食べたことないに決まってるだろう。というか君がそういう当然そうな顔で受け入れていることのほとんどは俺にとっては普通じゃない。
「こら、美香。和哉さんを馬鹿にしちゃあいかん。アレを食べたことないわけがないだろう。鍋料理の定番じゃないか。」
お義父さん、フォローしていただけるのは非常にありがたいのですが、はっきり言ってまったくなんのことやらわからないのですが。

食べたことどころかおそらく見たこともないです。

「そろそろ下ごしらえができましたからねー運びますよ。」

台所からお義母さんの声が聞こえる。

ゴクリ。

ついに俺は人生初の食材にお目見えできるらしい。

「まだ生きてますからね、少しのあいだかぷかぷうるさいでしょうが、鍋にいれたら落ち着くでしょう。」

そういいながらお義母さんの抱えてきた鉢に入っていた食材を見て俺は絶句した。

そして彼女に問うた。

「あれはいったい何なんだ？」

平然とした顔で彼女は言った。

『クラムボンだよ？』

鍋　【作：ＭｅｅＡ】（後書き）

駄作ですみませんでしたｍ（＿＿）ｍ
主人公の心の声を書きまくるのはいつものくせです。
そのおかげで主人公はいつも若干性格悪めで卑屈気味な男の人になりますｗｗ

ブログ←
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｍｕｓｌｃｌｏｖｅ／

放課後ＣＲＡＢ　【作：ｒａｋｉ】（前書き）

二番手は僕がやらせてもらいますｗ
この小説はいい加減な気持ちで作ってます（笑）
小説にする気もなかったので、小説としてどうなんだろうとか思わずに読んでいただけると助かります。ボケてツッコむクラムボンな会話劇、もう意味がわかりませんｗ
ハードルを下げて、下げて、下げまくって、なんなら埋めて、読んでくださいｗ
波長が合わなかったら遠慮無く次の竜司の短編に飛んでください（笑）
僕が良作であると保証しますｗ

放課後ＣＲＡＢ　【作：ｒａｋｉ】

「……遅いな」
僕、西山治樹（にしやまはるき）は半ばイライラしながら、呟いていた。
僕はたった独りの放課後の教室から校庭を眺めていた。この教室は三階にある。我が英高（はなぶさ）校では三階が最上階だ。部活で校庭を走り回ってる連中や、ちょっと遠くに見えるキャッチボールをやってる連中とか、カップルで下校しようとしてる連中とか、そんなのを眺めているだけでも、それなりに暇は潰せるのだ。
僕はある倶楽部に入っている。非公式の倶楽部だ。ホントの所、非公式である上に倶楽部でもなんでもない。唯の帰宅部　（正確には帰宅してないので帰宅部ではない）　なのだけれど、部長さんは頭が湧いちゃってる電波少女なので、そこの所をあんまり理解出来ていない。その証拠に、部員はそいつと僕だけである。しかも、僕は第二部長らしい。二人しかいない部員の両方が部長という異例のシステム……いや、確か古代スパルタを参考にしてるとか何とか。まあ、ただの気まぐれだと思ってくれていい。
そもそも、僕は強制的にその変な倶楽部に入部させられたのだ。興味がない。
……と、一人で追憶していると、教室に一人の女子生徒が入室してきた。僕が待っていた人物ではなかったが、その待っていた人物は気の狂った部長さんなので、この場合違う人が入ってきたことは歓喜に価する。
入室したのは、このクラスの委員長である、白崎奈緒（しろさきなお）。彼女は僕の小学生の時からの同級生だ。僕の通った中学校は小学校からの持ち上がりだから同級生の面子は変わらない。だから僕は白崎奈緒がどんな人間なのかちょっとは知っているつもりだ。
奈緒は中学生の頃からあまり容姿が変わっていない。高い鼻、キツそうな目にピンクの額縁のメガネ。肩までのストレートヘアに小

柄な体躯。いかにも委員長って感じ。可愛らしいというよりは美人だが、あんまりモテているようには見えない。多分、ウチの倶楽部の部長のせいだと思う。ウチの部長はクラスで一番の美少女だから、多分比較されちゃってる。とはいえ、それは見た目の話であって、現実的には人気度の差は明確だ。クラスの男子にウチの部長と奈緒のどっちが好きかアンケートを行ったら、全票が奈緒に入るんだと思う。あの部長は心が腐ってるからな。

「おっ、西山君。今日は一人？」

僕が何様のつもりか無言で彼女を見つめながら勝手に評価していたのが気になったのか、それとも最初から僕に話しかけるつもりだったのかは知らないけれど、奈緒は僕の席の隣に座り、そんなことを訊く。

「奈緒、やめてくれ。僕がいつも誰かと一緒に居るみたいな言い方じゃないか」

「仲良しな嵐山さんはどうしたの？」

「人の話を聞け。仲良しじゃねーし、一緒に居るのはアイツに無理矢理そうさせられてるだけだからな」

奈緒が言う嵐山というのが例の頭のオカシな部長の名前だ。フルネームは嵐山早奈美（あらしやまさなみ）。この高校ではちょっとした有名人で、いわゆる変人。誰も友達にはなろうと思わない。……僕は早奈美に友達認定されちゃってるけれど。

「無理矢理じゃないじゃん。今、待ってるんだから。嫌いなら帰ればいいでしょう。あ、もしかして私じゃなくて嵐山さんのほうが良かった？」

「冗談はやめろ。お前のほうが百倍マシ。いや、百万倍だ。大好き、奈緒ちゃん」

「……私は西山君みたいな不健全な男は恋愛対象ではないです。ごめんなさい」

うん、なんか、冗談で言ったのにフラれた。これは意外と心にクるものがある。

「いや、ちょっと待て！　僕は別に不健全じゃないんだけど……！」
「こないだ嵐山さん押し倒してたじゃない、わいせつ目的で」
「いやいやいやいや、誰があんなヤツ。あれはわいせつ目的で押し倒したんじゃないって」
「押し倒したんだね、西山君。否、西山」
「うわっ！　違う！　誤解！　呼び捨て怖えぇ！」
無実なのに！　僕は暴れる馬をなだめてた感覚だったのに！
コイツ真面目なのに、たまに悪ノリするんだよな……！
「まあ、そんな変態の西山君に相談したくはないんだけれど、一つ頼みを聞いてほしいのよ」
……と、奈緒は俄然冷静な表情を作ってそんなことを言う。
「え、何だ？　頼みって」
「私ね、出来れば嵐山さんと関わりたくないのね。……その、精神衛生上。だけど見捨てる訳にもいかないじゃない？　いや、見捨てるというか、多分事故にあってああなった訳じゃなくて彼女の中に芽生えた何らかの理解しがたい衝動が彼女をああさせたのだと推測するけれど、なんというか、委員長としてあれは注意すべきと思うわけ。だけど、絡まれるのはちょっとアレだし、ここは私の代理として西山君が嵐山さんを引き上げに行ってくれるとありがたいなって」
奈緒は長々と掴みどころのない話をした。正直、何を言ってるのかよく解らない。ただ、解ることは早奈美がまた妙なことをしているということだ。非常に面倒であることは伝わってくる。
「よく解らないけど、お前が嫌だと思うことを僕が快くやるわけ無いだろ。てかさ、早奈美は今どこで何やってんの？」
「いや……そのね。解らない。私にはよく解らない、真意が。でも、飛び込んだ所を見たんだけれど、それっきり浮かんでこないし、多分まだ沈んでるから引き上げた方がいいと思う」
「待て待て。なんだそれ？　沈んでるって、落ち込んでるってことか？　アイツに限って落ち込むなんてことはないと思うが」

「ううん。違う。沈んでるの。物理的に」
「物理的……？　どこに？」
「……プール」
奈緒は窓際から見える校内の屋外プールを指差してそう言った。

「……お前、何やってんだよ」
僕はプールサイドでボソリと呟いた。……その、なんというか、呟くしかないのだ。とりあえず早奈美が上がってくるまで。
驚くべきことに、僕がプールに来てから三分程経過したが、嵐山早奈美は未だプールに沈んでいる。一瞬死んでるんじゃないかと期待……もとい心配したのだが、残念ながら生きてるみたいだ。というのも、時々気泡が水面に上がってくるのだ。とりあえず早奈美が自力で息を止めているということは判明した。
しかし、早奈美はプールの底で何をやっているんだろう。そもそもどうやって沈んでいるんだ？　錘とか使ってんのかな。普通に制服のまま沈んでらっしゃるんですが……。
状況を理解したいのはやまやまなのだが、プールの壁の死角から辛うじて見え隠れする制服の端は見たものの、覗き込んでこのバカ女を直視するというのも気が引けるというかいたたまれなかったので、僕はまだ彼女がいるらしいプールの底を覗き込んでいない。
「いいかげんにしろ、バカ女」
僕は痺れを切らして早奈美を地上に呼ぶことにした。……いや、このままほっとけば絶命しそうな気はするが、このまま死なれても謎が残るし、僕が犯人にされそうな気がするから、とりあえず引き上げよう。それに、僕一人ではこの小説の間がもたないじゃん。
プールサイドから水面を覗き込む。
彼女はそこで沈んでいた。目が合ってしまった。というのも、驚くべきことにコイツ、ゴーグルを着けている。意味分からん。制服のまま沈んでるから、衝動的に沈んでるのかと思っていたが、ゴー

グルを用意している以上沈むつもりで沈んでいるっぽい。
てか衝動的に沈むってなんだよ！
「あ」
目があって初めて僕の存在に気付いたのか早奈美はゴボゴボと息を吐きながら浮かんできた。
「……おっす、治樹っち。今日何日だっけ？　四日？　五日？」
「とりあえず浮かんできて最初にする質問じゃねーよなそれ！」
満を持して我が倶楽部の部長、嵐山早奈美登場。早くも帰りたい。
「お前、何で沈んでたんだよ？」
「まあまあ、本題は置いといて、まずイントロをね、作者さんのエンジンかけなきゃ！」
「メタ発言するなって言っただろ。そして本題を置くな！　てか、お前が居ない間にイントロ終わってんだよ！　お前が教室に来ねえからな！」
重そうに濡れた制服姿でプールサイドに上がりながらピントのズレた事を言う早奈美。……まぁ、メタ発言は人のこと言えんが。
「あー、そうなんだ。じゃあその辺はカットで。……ということで、あたしはまた沈んでくるから、じゃあね☆」
「待て！　カットとかねえよ小説に！　そして沈むな！　お前次浮かんでくるのにまた何分もかかるだろ！　てか何でそんな息が続くんだよ！」
突込みどころが多すぎてこっちの息が続かねー！
「うーん、じゃあ今日はとりあえずこれでやめとくね。治樹ッチが愛おしそうな目であたしを見つめなければ浮かんでくる予定はなかったんだけれど、そんなにもあたしとお話がしたいということなら今日はもう陸に戻りましょう！」
「……」
女を殴りたいと思ったのは初めてかもしれない。
「僕が覗き込まなかったらまだ沈んでたのか？　もしかして」
「うん。あたしね、嘘だけど潜水の日本記録持ってるからもうちょ

っと息続くよ」
「嘘だけどって先頭に付けるのは新しいな、おい」
「ホントは日本二位」
「嘘の方向性がチゲーよ！」
何だその隠れた才能は！
「いつ潜水の記録なんて測定したんだ！？」
「一昨日、プールに沈むには息が長く続かなきゃ駄目だなって思ったから一ヶ月前くらいに練習を始めて、一昨日大会があったんだ」
「因果関係オカシイって！」
何だその謎の努力は。何でプールに沈みたがる。
早奈美は僕のツッコミを華麗にスルーして、更衣室に入っていった。
そして更衣室から大きな声で一言。
「着替えは覗いても、プールは覗くなよ！　治樹ッチ！」
「逆だバカヤロウ！！　誰かに聞かれたら勘違いされるだろーが！！」
なんて女だ！　僕がどんどん変態みたくなってるじゃないか！

舞台は変わって教室。ジャージに着替えた早奈美はスキップで教室に戻ってきた。……ちなみに僕は関係者だと勘違いされたくなかったので少し離れた場所から早奈美に付いて行った。
まぁ、関係者なんだけど……。
「治樹ッチ、スキップできないもんね！」
「スキップできないからしなかったんじゃなくて普通スキップで廊下を移動しねーからしなかったんだよ！　そして地の文を読む特殊能力は捨てろ！　宇宙人かてめぇ！」
早奈美はさっき奈緒が座ってた場所に座りスポーツタオルで濡れた髪の毛を拭いている。早奈美は胸の辺りまで髪があるので多分そう簡単には乾かないだろう。

「治樹ッチはなんでプールに来なかったの？　誘ったのに」
「誘われた覚えねーよ」
だいたい、高校生二人が放課後のプールで沈んでるって色々駄目だろ。
「今日やるって言ったじゃん」
「いや、今日も『放課娯倶楽部』やるとは言ってたが、いつも場所は教室じゃんか」
『放課娯倶楽部』ってのは、僕と早奈美で構成される倶楽部の名称。「後」が「娯」なのは「娯楽」が掛かってるんだって早奈美がドヤ顔で言ってた。活動内容は放課後の暇つぶしらしい。……要するに僕はいつもこの教室で早奈美のボケにツッコミを入れるフラストレーションの溜まる活動をやってるわけだ。
「『放課娯倶楽部』じゃないよ！　今日は『放課後ＣＲＡＢ』をやるって言ったの！」
「ん？　なに？　『放課娯倶楽部』だろ？」
「いやだから『放課後ＣＲＡＢ』だって！　『シーアールエービー』！　文字読めよカス」
「カスって何だよ！　文字読めんのお前だけだろ！　僕はお前みたいに地の文も読めねーよ！」
「死ね、そして死ね」
「接続詞の新しい使い方開拓すんじゃねー！！」
この小説この女が登場してから台詞割合高すぎだろ。もう疲れてきたっつうの。
それより、「ＣＲＡＢ」って何だ？
「蟹よ、蟹、読めないの？　解らないの？　キモいの？」
「言っとくけど、最後の一つオカシイからな。てか、別に蟹は解るよ。何が蟹なのかってことだ」
また地の文読みやがった。コイツ、ＣＩＡかなんかに入ったほうが良くないか？
「蟹の気持ちになるってことよ」

「蟹の気持ち？」
「『やまなし』よ、宮沢賢治（みやざわけんじ）の」
「……『やまなし』ってあの小学校の教科書に載ってたやつか？」
「うん。あたしあれ好きなの」
宮沢賢治の短編童話『やまなし』には確かに蟹の兄弟と父親が出てくるけど……。『やまなし』は色々と謎の多い作品だ。作中に一切の明確な説明のない「クラムボン」という単語や「イサド」という地名が出てくるが、それが一体何なのか、その正体は学者でも判っていない。
「でもさ、ゴメン、『やまなし』が好きだからプールに沈むってのが解らない。てか、つまり、全部解らない」
「クラムボンの正体を掴むためには、蟹の気持ちにならなきゃ駄目でしょ？」
「何で？」
「続きはＷｅｂで！」
「張り倒すぞてめぇ」
まぁ、張り倒したらまた奈緒になにか言われそうだけどさ……。
「うるさいなー。クラムボンの正体気になるでしょ？　あたしはその正体について研究してんの。それだけ」
早奈美は何故か乾いた髪の毛を（いよいよ宇宙人だと思う）後ろで縛って、脚を組んだ。
「あのさ、クラムボンの正体なんてどうでもいいだろ。そもそも、あれは判らないから印象に残ってるわけで、正体を解き明かしたらつまんないじゃんか」
「死ね、それか死ね」
「一択じゃねえか！」
……まじで、コイツ警察に捕まんねーかな。
ちなみに僕は早奈美にもう千回は呪いの言葉を吐かれてる。
「……で、そのクラムボンの正体は判明したのか？」
正直さほど興味はなかったが、学者でも解らないことを逆にこん

なやつが解き明かすって可能性もなくはないっていうか、ここまでの狂人がプールに沈んでまでして得たものというのには少しは興味が湧く。
「奈緒ちゃんは二枚貝って言ってたよ」
「あれ？　奈緒も関係してんのか、その話。さっきは何も言ってなかったけど」
「そーなの？　プールの底で水面を見上げたら蟹の気持ちが解るんじゃない？　って言ったの奈緒ちゃんなのになー」
「……そっか」
　なんというか、奈緒の苦労が解った気がする。あいつ、絡まれたのがめんどくさくて適当に冗談言って逃げたのに本当に実行されちゃったもんだから僕に頼みに来たのか。同情するわ、本気で……。
「二枚貝説はあたしの説の次に有力ね」
「……奈緒の説がお前の説の次」
「何？」
「いや……別に」
　別にいいや、突っ込まなくても、めんどくせえ。
「で、二枚貝説ってどんな感じなん？」
「うん、『かぷかぷ笑う』ってのも二枚貝なら納得いくし、『殺された』後に再度『笑った』っていうのも二枚貝なら矛盾しないんだって。中身だけ食べられたなら貝が殺された後に笑ってもおかしくないでしょ。貝殻残るし。しかも二枚貝って英語でクラムだし、ボンを『坊』って意味で捉えれば二枚貝の子どもになるって言ってたよ」
「へー。アイツ何真面目に応えてんだよ、すげえな。さすが委員長。そういえば魚がカワセミに食われるシーンもあるよな。貝が食われるように魚もカワセミに食われたってことか。構図がよく出来てるな」
　精神衛生上良くないとか言ってて、結構喋ってるんだな、奈緒は。真面目というか何というか……。早奈美と会話するときは半分くら

い聞き流さないと頭痛くなるのに。
「で、お前はそれには賛成じゃないんだ？」
「まあね。クラムってのは生きた貝のことを主に言わないのよ。だから殺される前の貝に対してクラムボンってのはちょっと論理的じゃないよねー」
「……」
珍しくまともな指摘をしてるのが気持ち悪いな。存在が丸々混沌としてるような奴なのになんで部分的に論理的なんだよ。ていうか、コイツが論理的とか言うと寒気がする。
「多分、奈緒はそんなマジになって考えてないけどな。まぁ、いいや、それでお前の説は？」
「続きはＷｅｂで！」
「お前のそういうところが僕は大嫌いだ！」
「Ｗｅｂに来たらそこから詐欺を展開しようと思ってたのに」
「意外にも裏に犯罪性があったのかよそのネタ！　怖えよお前！」
ホントに通報するぞ。危険人物じゃねーか。
「詐欺なんて、半ばふざけたノリから入ったほうが引っかかるのよ。お隣りに住んでるヤクザが言ってたよ」
そうそう、早奈美の家の隣はいわゆる暴力団らしいのだ。
「お前はなんでお隣りのヤクザの話を聞ける立場にあるんだよ！」
「なんか組長の娘とあたしが似てるんだって。娘さんが恋人と駆け落ちして外国に逃げちゃって寂しく思ってたらあたしが隣に住んでたっていうね。そんな仲よ、あたしと組長の仲は」
「知らねーよ！　聞きたくねーってお前と暴力団の関係なんか！　どこまでホントでどこまで嘘なんだか知らねーけどよ！」
コイツは一体どこに向かってんだ！？
「それより早くお前の説を教えろよ」
「あー気になっちゃう？」
「作者がそろそろオチ考えなきゃって焦ってんだよ！」
「オチも考えずによくここまで書いたね、作者」

どうでもいいけどコイツの説でこの小説ちゃんとオチるのか？
「あたしの説は、殺人説よ」
「は？」
「クラムボンは人」
早奈美は僕の顔に自分の顔をグッと近づけて、真顔で言った。
「……ここにきてまた文字数を使うような説だなぁ。人ってなんだよ、人なら人って言うだろ。なんでクラムボンなんだよ」
「死体捨てるのに普段人がよく来るような川に捨てないでしょ。ましてや人を殺すとしたらなおさらね。蟹は人間を見たことがなかったのよ。クラムボンは蟹語で『人間』って意味なんだよ、多分」
そう言うと急に立ち上がり窓際を行ったり来たりする早奈美。探偵が暖炉の前でよくやるアレをやりたいんだと思うが酷く似合わない…。
「つまり……なんだ、最初に出てくるクラムボンと後に出てくるクラムボンは違うってわけか？」
「そう。犯人は人の来ない山奥に被害者を連れてきた。被害者はこれから殺されるなんて思っても居ず、何も知らずに笑った。しかし、カワセミが先の尖った嘴で魚を掴み上げたように、犯人は被害者を背後から絞め殺したのよ。そして最後に笑ったのは犯人の方のクラムボンってわけさ。その後やまなしの実が川に落ちるのも意味がある。あれは宗教的に鎮魂の意味があってね、ご存知宮沢賢治はそっちの方にも熱心だったわけだし」
早奈美は名探偵風の口調で（ちょっと、いや相当イタいジェスチャーも加わってたが）熱く語った。一見突飛なことを言ってるようだが、今までの不毛な会話から比べたら幾分マシな気がする。いや、クラムボンの正体を明そうってのが不毛だけれど……
「……なんつうか、新説だな、それは。でも、何で絞め殺したってなるんだ？　カワセミの件と重ねてるなら、どっちかというと刺殺っぽいけどな」
「ばっかだなあ、治樹ッチは。血が出たら川の水の色は変わるでし

ょ。その描写がないのは不自然でしょーが」
　何かムカつくけど反論できねえ。何で急に知能レベル上がったんだコイツ。人を苛々させる才能があるよな。
「いやね、この説はあたしにとっても新説なのよ。治樹ッチがプールのそこを覗き込んで笑ったでしょ。あれで、ピンときたの。水中から見たからぼやけてたわけなんだけど、それでも判るくらいの、人殺した後のお隣りのヤクザみたいな、にっくらしい顔で笑いやがったから思いついたのよ！　お手柄だね！」
「百歩譲ってヤクザの比喩は認めても『お隣りの』は要らねーよ！　僕の前で二度と隣人の話をするんじゃねーぞ！　何か禁忌に触れた心地がしたわ！」
「二度目は思いの外普通だったから、つまんなくて浮上することにしたんだけどね」
　……ん？
　二度目って何だ？　待て、早奈美は一体何の話をしてる？　僕がプールに沈んでる早奈美を覗き込んだ時の話だよな。あん時、僕は二度も覗いたか？　てか、笑ったか？
　いや、確かに気配というか痕跡というか、こいつが沈んでるのが判るレベルに、制服がたなびく感じとかは覗かなくとも少しは見えていたのだけれど、早奈美の位置から覗いたことが判るには僕が身を乗り出す必要があるわけなんだけれど。
　まぁ、着替えを覗くなよ的な（ちょっと違った気がするがここは記憶を編集させてもらおう）ギャグ……もとい嫌がらせ的な発言があったと思うが、実際には勿論覗いてないし、そもそもプールを覗くのとは話が違うだろ。
「早奈美……ちょっと確認な。お前、二度目って何のこと言ってんのさ？」
「だーかーらー、治樹ッチが一度目に覗いた時は、なんというか、鬼気迫る感情が伝わってきたというかね、その、笑顔の中にもどこか複雑な何かが渦巻いているような、例えば苦しみだとか恨みだと

か、そんな感じの笑みだったのよ。でもその直後の二回目は無表情って言うか無愛想っていうかつまんなーい感じだったから、あたしは浮上したわけ。日本語ワカリマスカー？」
　早奈美は変わらぬテンションでそう言った。……僕はどうやら気付かないほうが良かったことに気付いちゃったっぽい。
「……いや、うん、いや、まあ、うん」
　僕は顔面蒼白になりながら、恐怖のあまり笑う膝、否、大爆笑してる膝を両腕で必死に押さえながら、言葉にならない返事をした。
「何そのノリ、相変わらず気持ちワリーなー、治樹ッチは。あ、もしかしてあたしの新説にビビッちゃった？　なんならみんなに教えて回ってもいいよん。許可しちゃうよん。よん♪　よんよん♪」
　なんか急に、突如、前触れ無く早奈美の中で流行りだした、「かぷかぷ」さながらの謎な語尾の「よん」を連発する早奈美に、普段なら華麗にツッコミするはずの僕だが。残念ながらそんなテンションにはなれなかった。
　……その、なんというか、これを早奈美に言っていいものかちょっと微妙なんだけど、彼女がその「新説」とやらを学校中に広める度に思い出したくないので、一応僕はその事実を告げることにした。
「あのな……早奈美、落ち着いて聞けよ」
「よん？」
「いや、遅ればせながら答えるが、今日は四日じゃねえ、そして聞け」
「なんなんだよーん？」
「あのな……、僕は二回も覗き込んでないし、お前を観て笑っても居ねえんだよ。だとするとだ……二度目に覗いたのが僕だよな？　お前一度目の直後に二度目があったってさっき言ったな？　僕は覗く前に三分くらいプールサイドに居たんだ。一回目に覗いたのは……一体、誰だ？」
「……」
　早奈美の顔がドンドンと青ざめる。……その、なんか、皮肉なこ

とに青ざめて初めて普通の美少女になってる。いつものヘラヘラした感じはどこに行ったのやら。
いや、でも、しかし、僕も人のことは言えん。顔面蒼白、膝はガクブル、僕等はどこで誤ってしまったのでしょう。
僕がプールを覗いたところ？　奈緒がプールに飛び込む早奈美を目撃したところ？
いいえ、早奈美が『やまなし』を読んだ時点がすべての誤りでした本当にありがとうございました。
もう、早奈美に至ってはあまりに衝撃的だったのか、あんだけフザケたマシンガントーク女なのに、もう、無言で口を開いたり閉じたりしてるもん……泡吹くんじゃなかろうか、蟹だけに。
――ガラガラ。
……と、こんなタイミングで教室の戸を開く音がした。
「あ」
僕が短く反応すると、再び入室してきたこの人――委員長白崎奈緒は真面目なのかなんなのか……いや多分真面目だから関わりたくないくらいぶっ飛んだ性格の早奈美が今に限って恐怖のあまり泡吹きそうな様相で口を開閉してるもんだから気を遣って、しかもユーモアを添えてそう言ったのだろう。
「……あれ？　どうしたの、そんなに口をカプカプさせて。まるでクラムボンじゃない」
泡を吹いてぶっ倒れる早奈美を視界の端に捉えながら、本日、僕はクラムボンの正体を理解した。

放課後ＣＲＡＢ　【作：ｒａｋｉ】（後書き）

このシリーズでは相変わらずのハチャメチャで申し訳ないｍ（｜｜；）ｍ

というのも、実はこのコメディには前作があるわけです。……まぁ、ドラゴンボールについてくっちゃっべってるだけのアホみたいな会話劇なので読まなくて大丈夫ですｗｗ

もし気になる方は『放課娯倶楽部』というタイトルですのでどうぞよろしくお願いいたしますｗ

いずれも、作者が楽しむことを目的に書いた拙作ですが、読んでいただいた方々に感謝します、そしてスイマセンｗ

外道の秘　【作：竜司】（前書き）

「なるほど。善く判りました、ご老体」景皇にとある悩みについての相談を受けた林は、偶然出くわした白伊豆に事情を説明した。三人は謎の老人の住む屋敷に赴くこととなり、後に衝撃の事実が白伊豆の口から明かされる。クラムボンとは何なのか。そのすべてに答が出る、夏の物語。

外道の秘　【作：竜司】

白伊豆隼人（しらいず はやと）は傍目からして実に中性的である印象が強いらしい。その端正で美しい顔つきは確かに女のようである。その性格もまた然り、女性的な感性を男に思わせる表情、所作の持ち主だ。

しかし白伊豆は同性愛者的素養は決して一切持ち合わせていない。つまるところ彼は美青年と云っていいが、その一言でくくるには余りある才色を魅せる。白伊豆には何をやらせても大抵不得意はなく、俗に云う天才とはこのことかと私は思う。

「おい、白伊豆。つまり、どうすればいいんだ。もっと判り易く云ってくれ」

喫茶店にて、私とこの男は雑談をしていた。

白伊豆は首を少しかしげ、小さくため息を吐きながら私を上目遣いで見据えた。まるで人形のような顔だ。男臭さはないが、男である。

彼は小馬鹿にしたような含みを持った笑みを作り、だがすぐに無表情になり私から目をそむけた。移り変わった視線の先には、私の隣にいる大男が呆けた面で座っている。

景皇裕司（けいこう ゆうじ）は兎に角阿呆だ。簡単に云えば白伊豆とは真逆の存在である。肥えて太った体に、お世辞にも善いとは云えない顔面、唯一の取り柄があるとすればそれは馬力だろう。

私たち三人は同じ高校を出て同じ大学に入った友人同士である。今思えば、どうして頭のネジが飛んだ景皇がK大学に入学出来たのかは謎である。その学力差的矛盾を白伊豆は何らかのコネクションだと推理している。私もそうだと思っている。まして景皇は最も不得意とする理系科目を扱う理工学部にその身を置くのだから、もはや八百長もいいところだ。

私は景皇の不潔な横顔をちらりと見た。途端にすべてのやる気が失われ、早く帰って寝たい気持ちが心を占めた。こうなったいきさ

つを私はあまり覚えていない。
確か、今朝も暑かった。
私は気怠い朝を自室に引きこもり扇子でも仰いで微睡んでいたはずだが、少しすると来客があった。それが景皇だった。
「何ですか、裕さん」
「相談があるんだが」
多分こんな感じのどうしようもない切り口だったと思う。正直ボウとしていて、善く覚えていない。それから私は一個上の先輩の下らない悩みを延々と聞かされたのだ。七月上旬の暑苦しい朝に聞く醜男の声はそれはそれは嫌気が差した。しかし仮にも先輩であるから、帰って寝てろとは言い難く、私は結局その相談内容を完全に理解するまで聞かされる羽目となった。その内容は至って最悪なものだった。
簡潔に云うと、景皇は性欲が抑えられないのだと云う。だからどうにかして欲しいと云うことだった。勿論、私にはどうすることも出来ず、とりあえず暑いから冷房の効いた喫茶店にでも行こうと云う話になった。そこで偶然にも一人でコーヒーを飲む白伊豆に出くわし、私は無欠の男に事情を説明したのである。
白伊豆は初め嫌そうな顔をしていたが、私がしどろもどろに話す内にどうでも善くなったようで、諦めて相談に乗ることにしたようだ。私が説明を終えると、白伊豆はこう云った。
「裕さん。あなたが他の人より性欲を持て余しているのは高校時代から知っているが、しかしあなたは何故悩むのか僕には理解出来ないよ。ある程度魅力的な女性であれば目にすると性的衝動に駆られると云うがそれは別段おかしくない。そんな男はどこにでもいるさ。問題はそれをそこのどうしようもない林静潤（はやしせいじゅん）という男に相談してしまったことだ。解決するわけがないだろう」
白伊豆が私のことを見下すのは今に始まったことではないので、私も特にその程度の蔑みには動じなかった。
人形の顔をした男は続ける。

「まあ、話を聞くに、つまりこのままでは何の罪もない女性を悲劇に巻き込み兼ねないと裕さんは思い、それで危機感を感じたわけだな？　全く――呆れてしまうよ。どうして君たちはいつもそう云う下らない話ばかり僕に持ち込んでくるんだ？　今年の一月だって会って開口この世に神はいるのかいないのか……そんなの僕が知るわけがないだろうに。少しは日の当たる会話をしたらどうなんだい。昭和天皇が崩御したとか平成と云う新しい元号になったとか。二月にはあの手塚治虫先生が死去したのに君たちはそんなのどこ吹く風だった。今年は他にもいろいろあったんだぞ。女子高生のコンクリート詰め殺人事件やら川崎では一億円が見つかった。四月には消費税が施行されたし、任天堂がゲエムボオイと云うものを発売した」

白伊豆は随分とうんざりした口調であったが、結局は哀れな先輩に救いの道を示そうとしたようだ。

「兎に角、性欲と現実を分けて考えるべきだね」

性欲と現実を分ける？

私は善く判らなくて――それにもう早く解放されたくて――口早にもっと判り易く云えと促した。私は寝不足なのか小さな頭痛を感じていた。白伊豆は首を少しかしげ、小さくため息を吐きながら私を上目遣いで見据え小馬鹿にしたような含みを持った笑みを作り、だがすぐに無表情になり私から目をそむけた。

景皇を一瞥しつつ彼は云った。

「裕さん、あなた自慰はするだろう」

景皇は口を半開きにして目を真ん丸にし、

「うん、する」

と云った。私は何故か嫌悪感を覚えた。

白伊豆は、それで善い、とか云いながら腕を組んでうつむき加減に喋り始めた。

「いいかい。裕さん。あなたは即ち深層心理的に女性とお付き合いしたいのだ。それはあなたにとっての『現実』だ。そして女性を凌辱したいと云う気持ちは『性欲』であり、本来『現実』とごちゃ混

ぜにして考えない方が善い。それで失敗する人間が多くて困るよ。この世には風俗店と云うものがあるだろう。あれは今僕が云ったところの『現実』ではなくて『性欲』なのさ。たとえばカップルを見て裕さんは嫉妬するのだろう？」
「う、ううん、まあ」
「嫉妬とは何だと思う？　実はこれは本来おかしな感情なんだよ」
「おい待て白伊豆。話が若干離れてないか？」
私は早いところ済ませたいのもあって、白伊豆のいつもの詭弁に付き合うつもりはなかった。しかし抑えられぬ性欲と云うものに対し、この男がどんな結論を出すのか全く興味がないわけでもなかった。
「静、君も馬鹿だな。全然話は離れてなどいないさ。むしろこれは近道だ。それとも何だ、君はこれから用事でもあるのか？　ないだろう。どうせ君は家で寝たいだけだ。しかしそれはあまり健康的とは云えないな。僕の話を聞いてその小さな脳みそに良識のひとつやふたつ詰め込んだ方が得だぜ？」
白伊豆は何もかもお見通しらしい。家に帰って寝たいことまで当てられた。私は少し逆らいたい気分を刺激された。毎回そうだ。私はこうやってこの天才に噛みつかされるのである。それを判って反抗する私だが、少し楽しんでいると云わねば嘘になろう。
「ああ、確かに僕はこれから用事などないさ。君と違って愛人もいないからな僕は。この夏も毎日眠り続ける予定だよ。しかし云わせてもらうがな、この休日に一人で喫茶店でコーヒー飲んでる君だって、十分に暇そうじゃないか。僕だけこぞって暇人だと云うのは心外だぞ」
「ははは。何を云ってるんだ、静。僕は福祉の講義をとっていてね。その課題レポートを作成せんとこんな暑い昼間から外出しているのだよ。今は休憩中だ。ほら、この中で暇人は君だけではないか。ははは」
「レポート？　一体何のレポートだい？」

「福祉さ。近所に住むお年寄りを回っているのだ」
「何だ。今、本当に必要な物は何ですか、なんて聞いて回っているのか」
「おお！　昼行燈の君にしてはなかなかの推理だったぞ。その通りだ。まさしく今君が云ったようなことを調査しているのだ」
「昼行燈、ふふ、面白い」
　景皇が笑った。
「お年寄りか。でもどこにお年寄りが住んでいるかなんて判らないだろう。家を外から見ただけじゃ」
「そう云うところだ、静」
　白伊豆は突然諭すような表情になった。なんとなく彼の云いたいことは判っていた。
「君はいつでもそうだ。どうして後ろ向きなんだ？　家にお年寄りがいるかいないかなど、入って聞けばいいだけだ。君は人見知りで鬱気質だからそう云うことが普通に出来ないのはそれこそ何年も前から知っているが、もういい年した青年なんだから改めろよ」
　この喫茶店は冷房が効いているが、なんだか白伊豆の言葉を聞いていると頭がくらくらするようだった。この後は実におぼろげだった。私はあまり何があったか覚えていない。ただ白伊豆がごちゃごちゃまくし立てていたのは記憶に残っている。
　――違いますよ。
　――裕さん、そうではなくてですね。
　――隔てなくてはいけないのですよ。
　――何でもかんでも一緒にしては駄目だ。
　――クラムボン？
「そうだろう。静。おい静、なに寝てるんだ。具合でも悪いなら医者に診てもらえよ。ついでに精神の方もな」
「――ああ」
　私の視界に、ぱあっと光が入り込んだ。それは私が顔を上げたからだ。どうやら学生のように机で眠ろうとしていたようだ。私は混

乱した。一体どれくらいの時間が経ったのだ。喫茶店はそれなりに客を溜め込んでいるのか、声がざわざわと私の背中を通り抜けた。何故私はここにいるのか、それすらうまく思い出せなかった。しかし隣の男を目にした途端、ほぼすべてを思い出して気が落ちた。

白伊豆は元気善く云った。

「それじゃあ行くか」

ど、こに？

景皇と白伊豆は立ち上がった。これから二人でどこかへ行くのか。それより待て。景皇の悩みについて答えは出たのか？　なら帰っても――

「おい、なに座ってるんだ。昼行燈。行くぞ」

白伊豆は何を云ってる？　私はどこかへ行くのか――そうするより他ないのか。意味が判らない。そうか、これは、寝起き特有のあれか。寝起きはこうなるさ。ところでこの二人は何を話していたんだ？　寝ているとき微かに声が耳に入っていたが、もう忘れていた。

私は少し唸ってから、立ち上がって背伸びした。とりあえずテーブルに置かれた水を飲み干した。善く冷えていてうまかった。白伊豆の声が右から左に流れた。

「さあ、行こうか。イタチさんの所に」

私は何だか気怠かった。

古賀イタチ（こが　いたち）は百歳を超える老人だと云う。

今回の白伊豆のレポート作成に協力してくれたらしい。何故、一度訪問したお年寄りの家にまた行くのか、私は聞いてみた。

「ん？　そうか、君は寝ていたから聞いていなかったのか。まあ、つまりお知恵を拝借するのも兼ねて、様子を見に行こうと思ってね」

「お知恵とは何だ？　どうして君だけでなく僕や裕さんまで行くんだ？　それに、さっきの話はどうなった？」

私たちは炎天下の下、汗をにじませながら歩いていた。ここから

そう遠くない団地に古賀イタチの家はあるらしい。それにしても歩くのは本当に嫌だった。
「靜、そう一度にいくつも質問しないでくれ。大体聞いてない君が悪いんだろう。家に帰れないからと云って喫茶店で寝るとはなあ。大したもんだよ。それより、君の持っているそれは携帯電話か？」
白伊豆はこちらを見ずにそう云ったから、どれのことかはすぐには判らなかった。
「その背負ってるやつさ」
「これはただのショルダーバッグだよ。それに、うちは携帯電話を買ってられるほど経済的に裕福ではないのだよ。君と違ってな。あれは保証金もやたら高いし、基本使用料も相当なものだぜ。それにショルダーホンなんて四年も前のを使うかよ」
「いやなに、妹に今晩のおかずを頼みたくてな」
それから私たちは口数少なく歩いていた。声を発するだけで疲れそうな暑さだったので、私もこれ以上追及するのは止め黙々と付いて行った。このまま帰るのは釈然としないので付いて行くしかなかった。
十五分ほどで、目的地にたどり着いた。側に竹の群れがある大きな屋敷のような家だった。敷地に足を踏み入れながら、白伊豆は云った。
「古賀さんとは一週間前にお話しさせてもらったが、いやはや、素晴らしき賢者だった。博識だよ。聞けばかつては禅宗の雲水だったらしいが、破門されたようだ。そのことについてはあまり深くは教えてくれなかったが。あ、そうだ」
白伊豆は突然立ち止まり振り返って云った。
「実は古賀さんはここが」
そう云って、白伊豆は自分の頭を指差した。脳に障碍があると云うことか。
「まあ、了承しておいてくれ」
そしてまた白伊豆は歩き出した。

玄関の前に立つと、二度ノックの音がした。私は玄関とは反対の方を見て、広い庭を見ていた。大きな土地を買ったものだ。さぞ金持ちなのだろう。しかし現役時代は僧だったと云う。私にはそれが儲かる仕事なのかどうか判らない。それはそもそも仕事なのか？僧については詳しくない。

「おっと、君たちに云っておくことがもうひとつある。いいか、中に入ったら一言も喋るなよ。ただし絶対とは云わない。兎に角、喋らねばならない状況に陥るまでは誰とも口を利かないでくれ。それと、なるべく足音は立てないで」

その意味不明な頼みごとについて私が尋ねようとすると――引き戸が軋んだ音を立てて開いた。

中から出てきたのは老婆であった。老婆と云っても腰は曲がっていないし、真ん丸眼鏡を掛けているわけでもない。だが髪は真っ白で、その表情にどこか疲労の色が感じられた。

「どうも、こんにちは。K大学文学部一年、白伊豆隼人です。この前はお世話になりました。後ろにいるのは同じ大学の友達です。レポートを手伝ってくれるみたいで」

老婆は、あらまあなんて云いながら白伊豆とこの前はああだこうだと世間話を始めてしまった。何も喋るなと云われている手前、会釈するだけに留めた私と景皇は蚊帳の外で、少し離れた所で話が終わるのを待っていた。私はここまで来ているのに、こうなったいきさつを知らなかったので頼りない先輩に尋ねることにした。

「裕さん、その、どうしてここに来ることになったんだい？　僕は眠ってたから覚えてないんだが」

「ああ、おれの悩みが解決しなくてな。伊豆は善く頑張った。でもおれには判んなかった。それで、お前も寝てたから適当に雑談してた。そんで、思い出したんだ。おれにはもう一個悩みがあった。悩みと云うか疑問だが」

そう云って阿呆が鞄からごそごそと取り出したのは、絵本だった。タイトルは「やまなし」とある。私はその絵本を知っていた。

「それは、宮沢賢治の『やまなし』かい。確か三年くらい前に出版された」
確か私は一年ほど前に読んだはずだが、あまり熱心に読まなかったので内容もそう詳しく覚えていなかった。あまり長い話ではなかったか。
「で、それがどうしたんだい」
私が云うと、景皇は徐々に徐々に泣きそうな顔に変わっていった。
「かぷかぷ笑うんだよ」
「は？」
「だからよお、粒が流れて死ぬんだ」
「何がだ」
「おい、二人とも」
白伊豆の声がした。景皇は今にも泣きそうな醜い顔で突っ立っている。一体何だ、この男は。
私の頭の中を何かがかすめた。もう少しで思い出せそうだ。
魚。蟹。かぷかぷ。水。光。
断片的な情景が、脳裏に再現される。
何か決定的なものを見落としている。私はそれを恐らく、極々最近、耳にした。
これは夢の――月、夜、イサド？　――夢の内容を思い出すのに酷似している。目の前を高速で一枚の写真が過ぎる。その写真には夢で見た一場面が鮮明に写っていて……
勿論、目で捉えるのは容易ではない速さだ。
結局、私は思い出したい何かを思い出せないまま、屋敷の中に入っていった。

屋敷の中はどこもかしこも黒ずんで見えた。
しかしそれは錯覚で、確かに黒ずんだ部分もあったが、あまり窓がないから日が入らなく影が多いのが起因している。

私たちは老婆に引きつられ二階に行った。二階にはいくつか扉が見えた。下の階とは違って大きな窓があり、真っ白な光が輝いていてどこか異様だが、私はこう云う異様さは結構好きだった。

「お爺さん、入りますよ」

老婆はしわがれた声で中に呼びかけ、扉を軽く叩いた。中からは何も聞こえてこなかったが、老婆は扉を開けた。

中に入ると、古賀イタチ――と思われる老人がいた。禿げた頭、眼鏡。老人は椅子に座って何をするでもなく私たちを見ていた。

「この前の学生さんがまた来てくれたわよ」

老婆が云うと、老人は静かに笑い始めた。この年になると、来客があるだけで嬉しいのか、それとも白伊豆がよほど印象善く接したのかは知らないが、兎に角、上寿の老人は喜んでいる。

「それじゃ、つまらない話し相手でしょうが、ごゆっくりどうぞ」

老婆は部屋から出て行った。部屋には三人の学生と一人の老人だけとなった。

私は部屋を見渡した。

特に変わったところのない平凡な部屋だ。本棚があり机があり、ソファもある。テレビジョンはなかった。ラジオが棚の上に置いてある。しかし埃を被っているので長い間使っていないのが判る。クウラアが起動しているようだが、そこまで涼しくなかった。若者が欲する涼しさはこの老人には毒なのだろうか。下らないことを考えていると、白伊豆が声高々に云い放った。

「こんにちは、ご老体。今日も暑いですね」

老人はこめかみをぽりぽりと掻いてから、そうじゃなと云った。

「立ってるのもなんじゃ、座んなさい」

私と景皇はなるべく音を立てないように、軽く頭を下げてからソファに腰を下ろした。白伊豆は真ん中に座った。私は漸く老人を真正面からまじまじと見つめた。ぱっと見た分には八十歳くらいに思える顔だ。八十五歳ですと云われれば私は信じただろう。

老人の視線は遠くにあった。

「ご老体、お体の御機嫌は如何ですか」
「満足じゃ」
「そうですか。ところで今日は、御知恵を拝借したく参りました」
老人はふぉっふぉっふぉと笛の音のような声で笑った。
老人はしきりに右の手の甲を左の掌でさすっている。同じ動作を延々と繰り返している。
これは障碍からくる行為だろうか。
「実はですね、性欲と云うものについて、どういった解釈を成せば善いのかと友人に相談されまして、どうやら性欲を抑えられぬと云うのですよ」
景皇は申し訳なさそうに薄ら笑いを浮かべながら会釈した。私はこのような汚らわしい話題をこの老人に振る白伊豆の精神を少し疑った――と云うか、自分のことでもないのに恥ずかしくなった。
「ほっほ、面白い。性欲か。どれどれ」
「僕は、性欲と云うのは一種の娯楽的要素として捉えるべきだと云いました。即ち、自慰で満足できれば善いと思えるようになる寛大な精神を有すれば善いのだと」
「ふむ、間違っておらんよ」
「だが友人はどうしてもそれでは腹の虫が収まらないと云うのです」
「白伊豆君だったかね。君の示した道はあながち間違っとらん。だが精神力のない者にそれを遂行しろと云うのは酷だのぉ」
「そうですね」
老人は少しの間を開けた。
「かつて儂も、性欲と云うものに悩まされとった。仮にも仏教徒であるから、仏陀様の教えは守らないかんでな。厳しい修行を積んで欲界から解放されるに至った経験もある。瞑想には不邪淫戒が前提じゃ。苦しみから解放されるには方法は色々ある。儂は禅を開く道を採っただけじゃ。禅那の心境に至る妨げになってしもう性欲はやはり禁ぜねばならなんだ。だが儂はいずれそれが比丘の安穏快楽と思わなんくなった。確かに性欲への執着がある限りは色界へは至れ

ん。じゃが儂はそんなのいずれどうでも善ぅなった。結局は儂は己個人の幸福を追求していただけの偽なる求道者でしかなかったのだ。この世の苦しみから逃れようと云う目的そのものが儂には不遜に思えての。目的と云う言葉そのものが傲慢で捨てるべき態度だと思ぅた。理由と云う言葉もまた然り。儂らはそもそもにおいて無知じゃ。判った気になっても本当は何も知らないのじゃ。だから何を語ろうとそれは空に向けた絵具と同じよ」

最後の方は少し荒かった。その辺りに曲げられないプライドがあるのだろうか。私は妙な威圧感を老人から感じていた。

白伊豆はじっと構えた態度で喋り出した。

「なるほど。善く判りました、ご老体」

私には判らなかったが、この人形には今の老人の言葉が理解出来たらしい。

「僕もたまにそう云う気持ちになりますよ。しかしそればかりでは苦しくないですか？　あなたはどこに生きているのです？」

「苦しみ……か。苦しいのぉ。それは確かじゃな。儂は皆に蔑まされ破門してからは、それはそれは辛い日々を送った。この世の何もかもが信じられんくなった。結局今までしてきたことは虚しかったと気付いたのじゃ。儂はどこにも生きていなかった。死んでいたのじゃ」

老人は自らの過去を呪っているように私には思えた。その理由が何なのかは、まだ判らない。

「自ら世界を見限り、自分で不幸な場所に歩み寄り、儂は障碍を授かった……」

老人は自身の障碍について自覚があるようだ。私は少しこの元坊主を見る目を変えた。自分に障碍があることを自覚する感覚とは一体どんなものなのか、ちょっとだけ興味が湧いた。

今度は白伊豆の番だ。

「なるほどやはり、あなたは百歳を超えてもそちら側におられるのか」

「何？」
私は何だか不穏な空気を読み取った。この展開はどこかで遭遇したことがある。
「確かにこの世は無常です。それは僕が云うよりあなたが一番に理解しているはずです。苦しいと云いましたね。それは破門が原因です」
「白伊豆君、この世の物事に単純に一言で表せる理由や原因は存在せんじゃ」
「その通りです。だからこそ苦しむ必要などない」
「……それはどう云う意味じゃ？」
そうだ。私は知っている。白伊豆隼人と云う男は、たまにこう云うことをする人間だ。私は過去に何度もこの男が人間一人の既成認識を論破し正常な道へと導くのを見てきた。初めて会ったときから古賀イタチを救うと決めていたに違いない。しかしこの老人は今まで一番の強敵だと私は思う。何かを完全に信じ切った人間なら、それを完璧な論拠で否定してやれば大抵はすぐに落ちる。この老人は何も信じていない。固執するものがないのだ。どうするのだ、白伊豆――
「あなたは自分で思うほど自分の価値を判っていません。あなたは非常に素晴らしい人間です。前回お話させて頂いたときはあなたの博識ぶりに驚かされた。あなたは賢者ですよ」
「……おっほっほ、元気な小僧のぉ」
私は不意をつかれ目を見開いた。老人はにんまりと笑って目をつむっている。
「儂を諭す気か。何が目的かは知らないが余計なお世話よ！　おっほっほ」
声の質が変わっていた。私は怖くなった。別人のようだ。先ほどまでのおとしやかな老人はどこへ行ったのか。
「やっと出てきましたか」
白伊豆は安堵するようにそう云った。出た？　何がだ。

「小僧、また会ったのぉ。儂に何か用か」
「ええ、聞きたいことがあるのですよ。ご老体」
「云ってみろ」

「クラムボンとは何ですか」

私は唖然とする暇もなく、もはや何も考えられなかった。
老人は立ち上がり、掠れた声で騒いだ。
「そ、その名を儂の前で口にするな！」
老人の見開かれた瞳を見て、私の背筋は凍りついた。真っ黒。
真っ黒な目だった。さっきまでは薄くしか開いていなかったから気が付かなかったのだ。私は絶句した。
「ご老体。あなたは破門されたことを恨んでいるのですね。他を恨む気持ちこそ自身を不幸に引き摺る根源！　それを判っていながらあなたは認めたくないのでしょう。だから釈然としない束縛感があなたを襲うのです」
白伊豆も立ち上がっていた。
老人は激しく呼吸し、顔が赤く変色している。
「こ、小僧、それ以上は何も云うな」
「逃げないで下さい。またあの人が出てきますよ！　あなたは本当の自分と向き合いたいのでしょう。誤魔化すのは善い加減にして、自分の過ちを認めるのです。あなたなら出来ます」
「うぐぅ」
「古賀イタチさん！」
そして老人は見たこともないほど大きく開口し、恐ろしい声を出した。その声を聞いてやってきた老婆が老人を布団に寝かせ、私たちは屋敷から出ることになった。
外に出た私はほとんど慌てていて、もはや錯乱していたと云って善い。
「し、白伊豆！　一体……」

――クラムボンとは何ですか。
――クラムボン
思い出した。
私の中でずっと引っかかっていたのは、これだったのだ。
「一体、クラムボンとは何なんだ！」
読んだときの情景が目に浮かんだ。無論、それはインスピレイシヨンから発生した私の妄想だが――兎に角、私は読み終えて思ったものだ。
クラムボンとは何なのだと。
景皇は呆然としていてやはり頼りなく、白伊豆は屋敷を見つめていた。

私たち三人は昼間の喫茶店に再度足を運んだ。他に行く場所もなかった。
老人は眠りに就いたらしい。今日はもう話せないと云うことだった。
私と景皇は説明を求めた。あれでは意味が判らな過ぎる。
天才は澄ました顔でアイスコーヒーを口に運んでいた。
「僕はただ単に裕さんの疑問に答えるためと、古賀さんを苦しめる概念を彼から取っ払うためにあの屋敷に出向いただけさ。君は無関係だよ、静」。
「無関係だと？　僕を起こして来やがれと云ったのは君だぞ」
「あれは君が暇そうにしていたからさ、どうせ帰っても寝るだけの男を善意で誘ったのだ。それに来る来ないは君の自由だ」
「善意とは何だ。あの屋敷で起こったことのどの辺に君からの善意を感じればいいんだ？」
「昼行燈の君がいつになく喋る日だな」
白伊豆はあからさまに嫌そうな顔をした。説明するのが面倒だと云いたげな顔だ。

私は喰ってかかることにした。
「おい、白伊豆！　僕が不安症なのは知ってるだろう。このまま何の説明もなしでは胃に穴が開くのも時間の問題だ。眠れないよ、いくら僕でも」
白伊豆は大いに笑った。
「はっはっは。そうかそうか。いくら君でもか。仕方ない。説明してやってもいいが……一体、君たちは何が判らないんだ？　僕にはそれが判らない」
この男は常にひとつ上の次元に身を置いている。だから会話がかみ合わないのはいつものことだ。しかしここまで意味不明な事象の繰り返しではさすがの私も落ち着かない。
「だから、何もかもだよ。クラムボンとか性欲とか、あの怪しい爺さんやら、いちから説明してくれないか」
白伊豆は少しの間を置いてから、まず景皇に向けてこう云った。
「裕さん。疑問は解消されたかい」
私の隣の大男は、首をぶんぶん振った。否定している。目の前に座る人形は、次にこう云った。
「では、性欲については？」
景皇は少し考えてから首を縦に振った。肯定している。しかしどこかぎこちない。完全に納得したわけではないと云うことか。
「そうか。まあしかし、何となくは判ったのだろうね」
「ああ。少しな。難しいんだな。欲は抑えなきゃな。おれにはまだ考えるのは早い話だったみたいだな。有難う、伊豆」
「礼には及ばないよ。ま、性欲は自慰で処理できる下らないものだと思えば善いのさ。それに人間はそこまで忍耐力のない生き物じゃあない。いいかい、人間とは耐え忍ぶことが唯一他の動物と違い成せるのだ。裕さんにも出来るさ。現にまだ犯罪だって起こしていないだろう。あまり思い悩むことはないさ。さて、それで……」
白伊豆は私を上目遣いで軽く睨んだ。
「あの爺さんが気になるか、静」

「ああ」
古賀イタチ。私にとって最も興味のある要素である。
あの豹変ぶりに、白伊豆のクラムボンについての質問への動揺。
コップに入った水を一口飲んだ。
「さっきも云ったが、僕は裕さんの質問に回答するためと、古賀さんの精神異常を少しでも癒したくて屋敷に赴いたのだ」
「精神異常だったのか？　脳の障碍ではなく」
「奥さん――あの婆さんは脳に障碍があると云っていたな。ただ医者に診てもらったわけでもないらしく、それが本当に脳障碍かは判らない。婆さんが云ってるだけかも知れない。僕が初めて会ったときは――精神の異常だと思った」
私には脳障碍も精神異常もそう大差ないように思えたが、不用意な発言は慎まないと白伊豆に怒られそうだったのもあり、あえて言及しなかった。それに私はそっちの知識に詳しくない。それは多分、この男も同じはずだ。
「君もその目で見たから判ると思うが、彼には人格がふたつあるのだ」
その言葉を聞いた私は――うなずけないでもなかった。
確かに老人はあるときを境に豹変したように見えた。
「二重人格か？」
「正確には解離性同一性障害と云う。僕も専門家でないから詳しくはないが、まあ、君が想像する二重人格だと捉えて問題ない」
「どう云った人格とどう云った人格なのだ？」
「即ち、開き直った人格と、自身を弁護する人格だ」
判らない。説明を聞くより他ない。
「普段の古賀さんは、どっちだと思う？」
「それは君、豹変してしまう前の彼が通常なのだろう。それが弁護する方か開き直った方かは知らないが」
「違うよ。僕たちが最初に会った古賀さんこそ、通常でない方の彼だ」

「なに？」
急に足場がなくなった感覚を覚えた。
白伊豆は至って平坦な表情で続けた。
「僕が初めて訪ねたとき、彼は来客がよほど嬉しいのか、本当に色々なことを話したよ。彼の人生の大体は判った気になってしまうほどね。そこで僕は、彼の半生を知りあることに気付いたんだが」
そこで白伊豆は景皇を一瞥したが、すぐに視線を泳がした。
「まあ、これは後で善い。兎に角、彼の人生はなかなかに興味深かったわけで、僕は独自に古賀イタチと云う人物についてこの一週間余り調べてみたのだ。それで予感は確信に変わったのがまさに今日だ。そこへ君たちがふらふらと姿を現した」
奇麗な肌をした美青年はコーヒーを一口飲んだ。
私も水を飲んだ。
「何かの偶然かと思ったよ。いや、偶然なんだが、偶々だ。まさか裕さんがあんな質問をするなんてね」
あんな質問？
一体何のことだ。
「おい、白伊豆――」
「クラムボンとは何か――ってね」
私はまたしても気を落とした。どうしてその単語ばかり出てくるのか。元坊主とクラムボンに一体何の因果が存在すると云うのか。いらいらはクラムボンと聞く度に蓄積した。
「さて、勘の善い静ならもう判る頃合いかな。既に役者は揃っているぜ」
嫌味が好きな男はにやにやしながら私を見た。悔しいがまだ謎は解けそうにない。
「くそ！　もったいぶらずに教えろ！　白伊豆」
「まぁ待て、昼行燈。順序が重要なのだ」
「クラムボンとは何なんだ！　君はその答えを知っているのか」

「知っているさ」

白伊豆はどこまでも落ち着いた――威厳のある声でそう云った。

私は限界に達しようとしていた。

「判った。認めるよ。僕は馬鹿だ。昼間に提灯灯しても役に立たない昼行燈の林靜潤だ。ほら、この通りだ。これでいいだろ？　なぁ、もったいぶらずに教えてくれないか」

しかし、白伊豆は相変わらずのとんとん拍子だった。

「落ち着けよ。どうして君はいっつもそうなんだ。それだから阿呆に拍車がかかるのだ。男ならもっとわきまえ賜え」

率先して卑下したにも拘わらず、私の願いは聞き届けられなかった。善い加減私も順序とやらを重んじることにしてみた。

私がテエブルに突っ伏すと人形の声が響いた。

「クラムボンの話は一旦置いておこう。古賀イタチ。彼の辿った人生は簡単にまとめるとこう云うことなんだ。大乗仏教禅宗の雲水であった彼は、かなり優れた修行僧だったようだ。彼を知る御坊さんに聞いた。しかし優れていたはずの古賀さんは、あるときから修行を疎かにし始めた。問い詰められた彼は告白する。彼の言い分は、さっき屋敷で聞いた通りだ。信仰を止め、無神論者となり修行自体を否定した彼は当然破門され、孤独になった。それでも彼は修行が面倒になり不貞腐れていたのではない。それは間違っていると本気で説いた。必ず賛同してくれる者がいると信じて。それは誰より信仰の厚かった彼にしか出来ない云わば革命。彼は救いのつもりで反仏教を唱えたのだ。しかし、いかに優秀な者の発言であろうと、さすがに判りました信仰は今日限りで止めますなんて坊主はいるはずもない。彼は独りになってから長い間絶望していた。その絶望も根源的には精神性の高い救済心があってこそのものだ。この点に於いて彼を否定することは出来ないと僕は思うね。兎も角、それから彼がどうなったかと云うと、要するに精神を病んでしまったのだ。病んだのは己のしたことが間違いだったと気付いたからだ。だから、

それ以上心を傷付けないためには、必要だったのだ」
――もうひとつの人格。
「そして生まれたもうひとつの人格は、徐々にそちらの人格でいる方が通常なのだと云わんばかりに長い時間を独占した。全ては己の精神安定の無意識的な作用のためだ。そして古賀さんは、さっき屋敷でも云っていたように、ある障碍に見舞われた」
……今、何と云った？
私は顔を上げた。
「おい、どう云うことだ？　障碍と云うのは、精神異常のことだろう」
そのはずだ。きっと白伊豆の云い間違いだ。
「……君たちは、僕があれほどお膳立てしたのに気付かなかったのか」
何だ、何を云っている――
「障碍と云うのは、白――」
「古賀さんは盲目と云う障碍を患っているのだ」
「な、んだ、と」
私はさぞかし間抜けな面だったことだろう。
まさか、しかし、まさかそんなことは……
「あっ」
そういえば、白伊豆は屋敷に入る前、私と景皇に意味不明な忠告をしていた。足音を立てるな、可能な限り話すな、
そう云うことか。
あれは白伊豆以外には客はいないと老人に思わせる布石！
事実、老人は私と醜男の存在について一切言及していなかった。
考えてみれば不自然だ。しかし、盲目であるとは思わなかった。
「古賀さんは自身の解離性同一性障害についての自覚はまるでない。今日話したとき障碍を授かったと云っていたのは」

「盲目のことだったのか」
「そう」
私は、古賀老人は自分が脳障碍であることを自覚していると云う誤った認識をしていたわけだ。白伊豆が私と景皇の存在を隠したかったわけは、老人に要らぬ気配りをさせず、あくまで一対一の話し合いを認識させたかったからか。
更に美青年は続けた。少し抑揚のある声で。
「そのことを知ったかつての仲間坊主たちは、教えに背き、侮辱した天罰が下ったと――」
「そんな！　古賀さんは仏教を侮辱してなどいないだろう」
「今から五十年以上も昔の話だ。言葉ひとつで捉え方もまちまちだ。そう云う誤解をされたのは仕方のないことだったのかも知れん」
自身の考えは受け入れられず、破門され絶望し、盲目になりそれは自業自得の天罰だとかつての仲間に蔑まされる。私はあの老人の悲しさを、この話を聞くまで誤解していた。
「そんな過去があったとぁなぁ」
景皇が呆けた声で呟いた。
喫茶店の客並みはまずまずと云ったところだった。
心地善いざわつきが私の鼓膜を撫でている。そのことに意識するまで気付かなかった。
白伊豆はアイスコーヒーをぐいっと飲み干すと、景皇の顔を見て云った。
「裕さん、もう、判ったろ？」
景皇は首を傾げ、もごもごと唸りだした。どうやらクラムボンの正体が何なのかはまだ判らないらしい。無論、さっきから頭の片隅で私も考えているが、全然判らない。
ここまでの話の流れでクラムボンの正体など判る道理がない。
天賦の青年は最後の引き金をどう引くのか。
とても興味が湧いた。
「さすがにここまで云えば、すべての謎は解決したはずだぜ。なぁ

静。ほら、裕さん。判ってないのはあなただけみたいですよ」
「皮肉は止めろ、白伊豆。それで、どうしたら今の話でクラムボンの正体が判るんだい。大体、君の云うクラムボンとは宮沢賢治の『やまなし』に出てくるあのかぷかぷ笑って殺される奴のことなんだろうな」
「当たり前さ。正真正銘、そのクラムボンのことだ。僕の話を聞いていればその正体が判るはずだ。判らないならただの馬鹿だ。全く救いようのないね」
「お前、裕さんに失礼だろう」
「いや、おれ、馬鹿なのは認めてるよ」
景皇が恐ろしい笑みを見せて、私は何故か喉の渇きを覚えた。
ふう、と人形は息を吐いた。
私は少し身を乗り出した。
「可哀相だから、単刀直入に云おう」
私の鼓動は――特に高鳴りはしなかった。
人形は口をゆっくりと開いて、
云った。

「古賀イタチこそクラムボンの正体なのだ」

私は一瞬、停止した。
そして稼働するまで、少し時間を要した。
く、ら、
古賀、古賀――
イタチがクラムボン？
止せ。
何を
「何を云うんだ君は」
私は精一杯の言葉を発した。これが私の到達した感想を言葉にした臨界点だった。

白伊豆はやっぱり――澄ました表情だった。
「静、どうしたんだ。ハトが豆鉄砲でも喰らったような顔をして」
「あのな、白伊豆。君お得意の焦らしはいいが、こればかりは信じようにも信じられんぞ」
あの老人がクラムボン？
意味が判らない。
これは白伊豆の性質の悪い御ふざけか？
「その顔は似合ってるぞ。ああ、君では理解の許容をまたしても超えてしまったのか。まぁ無理もない。僕は初めから期待していないさ」
「悪ふざけなら勘弁してくれよ」
「はっはっは！　これまで僕が悪ふざけなどしたことがあるかい？　ないだろう、静！」
「判った。では順序善く説明してくれ。そうしたら納得出来るかも知れない」
「そおだ。順序だからな、大切なのは。判ってきたじゃないか」
白伊豆は満足げに頷いていた。
そして今度はジュースを飲みながら語り始めた。
「古賀イタチさんは――君たちにどう映る？」
――始まった。
私は内心小躍りした。
景皇が答えた。
「可哀相だ」
「ふむ」
頷くと、既に美青年は私に視線を送っていた。お前はどうなんだと尋ねる視線だ。
「そうだな。少し悲劇だが、全く彼に非がないわけでもない。だから一概に同情するとは云えないな」
「なるほどね。では質問を変えよう。彼はどんな状態だと云えるかな」

状態？
「……目が見えなくて、精神も不安定だ。心的負担も大きいだろうし、善い状態とは云えないな」
「そうだね。もっと簡単に云うなら？」
私は少し考えた。私が答える前に景皇が云った。
「可哀相だ」
白伊豆は困った顔をした。結局、私は何も思い浮かばず、美青年は溜め息混じりに結論を出した。
「だからさ、彼は『眩んで』いたのだよ」
「眩んで？」
「そうだ。いいかい、これは案外大したことのない、つまらない話だ。だから説明するのは嫌なんだがな。どうして君たちは気付かないんだ」
またお得意の焦らしか。
「おい、白伊豆。もうそう云うのはいいから、結論を云ってくれ。善い加減、疲れたんだ」
これは私の本音だった。白伊豆はにやりと笑みを作ると、しょうがないなぁと云って、前髪を弄り出した。
「クラムボンと云う言葉はね、語源があるのだ」
「え」
そんなこと考えもしなった。予想外の角度から飛び込んできた打撃が、私の頬を直撃した。
「クラムボン……くらむぼん……眩む坊」
「三回もクラムボンと云われたって判りぁしないよ」
私はショルダーバッグから紙と鉛筆を取り出した。
「おお、昼行燈の割には準備が善いじゃないか。感心したぞ」
「君はいつも手ぶらだからなぁ。何か持っててもポケットに財布くらいだろう」
「何を云う。ハンカチも常備しているぜ」
そうこう云う内に白伊豆は「眩む坊」と書いていた。

私は目を疑った。
「君、まさか、これが『クラムボン』と読むのだなんて云わないだろうな」
「おお、今日は意外に冴えてるな、昼行燈」
そんな馬鹿な話があるか。
私は呆れた。「眩む坊」とは眩む坊主、眩む僧を差している――そんな子供騙しのようなことが……
「視力を失った古賀さんは、その志こそ不遜と云う認識が植えつけられていた上に、目が見えない、つまりふたつの意味で眩んでいると云われたのだ」
「目が見えないと云うことと、反仏教と云う思考が誤った判断を下していると云うふたつの意味でか」
「そうだよ」
それで時が経過するにつれ、眩む坊主は眩む坊、クラムボンと呼ばれるようになったと云うのか？
それは本当か？　誰かのでっち上げに思えてならない。
「クラムボンは僧たちの間だけで広まったと云って善い。それなりに有名な事件だったからね。しかし古賀イタチは彼らからすれば既に反勢力も同然だ。そのクラムボンと云う言葉は伝播し過ぎたものの、いっそ禁句にしようと云う極秘のタブウが自然に発生したのだ」
「誰から聞いたんだ。タブウなら君にも話さないだろう」
「僕のコネクションを見縊らないで欲しいな。それなりに権威を持った御坊さんに聞いたのだ。嘘を吐くような人ではない」
確かにこの皮肉屋のコネクションは侮れないものがある。私はそれをこの四年余りの付き合いで知っていた。
しかし。
「それでは何だ。あの宮沢賢治の『やまなし』についてはどう説明するのだ。まさか、宮沢賢治は古賀イタチのことをモチーフにあの短い話を書いただなんて――」
「云うのだよ。靜」

――嘘だろ。
私は無論、すぐには信じられなかった。どこかで否定したい気持ちが強く働いた。そうでなくては、薄気味悪いではないか。何なのだ、クラムボンとは！
人形のように奇麗な顔をした青年は、しかし澄ましている。
「勿論、さすがの僕も宮沢賢治とは何の繋がりもないが、一説に、彼は頼まれて書いたのだと云われている。都市伝説的な存在となったクラムボンがいつ宗教世界を超えて伝播するかは判らない。身内から出た不祥事はなるべくなかったことにしたいのだ。そこで世間に名の通った宮沢賢治にコンタクトを取れる僧がいて、クラムボンの抽象化を狙い、『やまなし』の制作を依頼したと……おっと。これはあくまでも聞いた話だ。その辺がどうも曖昧で、完全な証拠などない。あっても揉み消される思うがね。なんせこれはタブウだ」
それからどうでも善い雑談を小一時間ほど交わした私たちは、もうすぐ日も暮れると云うことでそれぞれの帰路に着いた。
西日が沈みかけている。
夏の日の暑い一日は、今日も終わりに近付いていく。
橙色の光が視界に映る色んな物に反射している。私はこう云う景色は好きな方だ。
帰宅途中に白伊豆の実妹、白伊豆悦子（しらいずえつこ）に出くわしたので、途中まで一緒に歩いた。
「そういえば白伊豆の奴が君に買い物を頼んでいたよ」
「どうせそんなことだろうと思ってさっき買ってきた帰りなんですよ。この買い物袋見えなかったんですか？」
そう云って悦子は笑った。
「じゃあ、悦っちゃん、またね。捻くれ者の兄貴に宜しく云っておいてくれ」
「さようなら。こんど遊びに来てくださいね」
兄と似た奇麗な妹と別れると、私は独り、家に向かって歩いた。
ふと、老人のことが脳裏に浮かんだ。

クラムボン……か。
私は意味もなく笑った。
西日はもう……――

外道の秘　【作：竜司】（後書き）

どうもみなさん。ｒａｋｉ&竜司の、竜司です。今回は、今まで公開してきた個人的な作品の中では一番好きな作品です。推理物でもあるので、その点でも楽しんでいただけたらと思います。僕も楽しんで書けました。

読んでくださった方々にお礼を申し上げます。クラムボンの正体は何だったんでしょうね。僕にも判りません。白伊豆は本当のことを知ってそうで嫌ですが。それでは、またいつの日か。

白い水槽　【作：かふぇいん】

自分の知り合いに、変な男がいる。正確に言えば、変なところに住む変わった男だ。住宅街にポツンとある小さな林の、その中に立つ大きな白い屋敷がその男の居城。いつ尋ねても居て、いつ尋ねても一人だった。

どうやって出会ったのか、招かれたのか。どうしてこうして訪れるのか。今思えばそれすらよくわからない。

その部屋にはたくさんの水槽。それが四方中央問わず、所狭しと並べられたそこは、まるで部屋そのものが水中であるかのような場所だった。

北の棟の西、隅の部屋。ドアを開ける音がして、待っている間にと渡された本から顔を上げる。しっかりと遮光カーテンの引かれた窓際の、小さなテーブルにコーヒーを置いて、奴はこちらの手から本を取り上げた。容易く奪われはしたが、もっともこちらもしっかりと読んでいたわけでもない。『さかなの飼い方』など読まされても、奴はこちらを水槽に触らせもしないのだから意味がないのだ。

コーヒーに口をつけていると、横からの視線に気づく。大きな水槽に一匹だけいる大きな魚が、奇妙なものを見るかのようにこちらを見ているのだった。同じような好奇の視線が魚と自分とを行き交う。こちらが視線を外すと同時に、その魚もふい、と向こうへと親指の爪くらいの鱗を光らせて、水槽の向こうへと泳いで行ってしまった。

「……変な奴だな」

「ジョバンニ」

呟くとそれに応えるように、奴はそう言った。何のことかと、そちらに目をやると、奴は餌のケースを手にこちらへ来た。

「こいつの名前」
奴はパラパラと“ジョバンニ”の水槽に餌を振りいれた。水面を波立たせ、空ごと食みながら巨魚は餌を食べる。えらから溢れた空気が、水銀の粒のように水面へと上ってはぜた。奴はまた別の餌を持って、今度はちらちらと光る熱帯魚の水槽の方へ行く。
奴の水槽には、河海の区別は無い。海はそう近くもないと言うのに、海の魚もまるで初めからここにいたような顔をしている。
「それにも名前があるのか」
尋ねると振り返りもせず、奴は応えた。
「全部についてるわけじゃない」
尾にとりどりの色を纏う小魚が、鮮やかなそれを映しながら、銀盆のような水面をつつく。花を撒いたような光景。それが終わると、奴はまた別の方へとすいと歩いて行ってしまう。水槽に囲まれた僅かな空間を、滑らかに泳ぐように。
「これにはある。シグナルとシグナレス」
奴が示す水槽は小さく、薄青い色の魚が二匹入っていた。ぴんと張った尾を揺らし、身体に沿って輝く蛍光をちかちかと瞬かせながら。片方が動けば、もう片方がそれを追い、広い水槽を二匹揃って、散歩している。
「つがいなのか」
尋ねてみたけれど、奴はさぁと首を傾げて、それらに餌をやる。
「子が出来たためしがないから」
こちらも、ふぅん、と答えたきり、しばらく会話は無かった。奴は変わらず、水槽の間を回遊している。ぐるりと餌をやって回ればいいのに、あっちに行ってはこちらへ戻り、ふと立ち止まって見ては、ついと動き出す。
「これだけ水槽があったら、電源が大変だろう。火事になったりしないか」
ふと思い立って尋ねてみると、何を馬鹿なことを言うのかと言わんばかりに、眉も動かさず奴は言う。

「火が出ても、消すための水がいくらでもあるじゃないか」
それだけの話では済まないだろうに、奴にとってはそれだけの話でしかないのだ。静かな波の音と魚と水槽の息の音、それだけがこの天色の部屋の全てで、奴がそれを当たり前に思っている間は、この部屋は当たり前のように存在しつづけるのだろう。
奴はこちらに歩いてくると、コーヒーをどかし、一番小さな水槽をテーブルの上に置いた。部屋の隅の引き出しから取り出されたのは、理科の実験のような細々とした道具。乳鉢の中に、小さな粒とそれを潰すための乳棒があって、向かいの椅子に腰を下ろした奴は陶器の音をさせながらそれを動かしていた。
小さな水槽に魚はいなかった。ただ、雪の降るように白いものが水の中で揺れている。時々、跳ねるように中を動いては、ゆっくりと底へ沈む。細かくその小さなものが動く水槽は、薄い窓の光に照らされて白い。奴は乳鉢の中身に水を足すと、赤いゴムのついたスポイトでそれを水槽に落とした。緑に濁るその液は煙のように沈んでいく。水面に映る雲のように、下に下にと湧きながら。
「こいつらに、名前があるのか」
思い立って問うて、向かいの奴の顔をじっと見る。無いとも有るともいえない表情。水槽の照り返す、光の網を顔に受けながら、奴は呟くように答えた。
「クラムボンたち」
「たち、か。いっぱいいるし、見分けがつかないもんな」
そう言うと、今度は奴がこちらをじっと見る。魚の目に似て、真昼の夢を見るような。
「こいつらは、全部がクラムボン。この水槽が、全部だ」
こちらが黙っていると、奴はめずらしく続けて口を開いた。
「こいつらは、笑うんだ」
餌をやったスポイトの口を、白い水槽の中に付ける。赤い頭を押すと、銀の泡が出て、口に“クラムボン”が数匹吸い込まれていった。奴はそれを隣にあった、小魚の水槽に垂らしてやる。そして、

振り返る。
「ほら、笑ってるだろう」
水槽は変わらず、中のものはゆらゆらと揺れているだけだ。
「おれにはわからん」
そう答えると、奴は、そうか、と言って座り直した。
「別の水槽に運ばれてったものは、食べられる。殺される。傍から見れば、悪いことだ。怖いことだ。でも、こいつらは笑う。食べられた奴を祝福して、食べる奴に微笑む。その中で、自分が生きていくことを知っているから」
奴は、微かに微笑んだ。滅多になく饒舌に、白いものを見つめながら。向かいの男はこの部屋という水槽の主。大きな魚のようで、この白いものたちのようで。そこにただ、底石のように座る自分は、ただ首を傾げて答えるしかなかった。
「やっぱりおれにはわからんよ」
応えてやると、奴は少し笑みを深めた。もしかしたら、クラムボンの笑みは、これによく似ているのかもしれない。

近くの窓からさらさらと白い光が入る。水槽を照らし、きらきらと輝くこの部屋は、さながら青い幻燈だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1809v/

クラムボンの多い料理店　【オムニバス企画】

2011年8月17日03時28分発行